

九州派について

九州派は単なる地域的な前衛運動ではなく、美術と現実の関係を根底から問い直した試みであった。私たちは、その今日的意義を再考する場として九州派を位置づける。

1950年代後半から1960年代初頭にかけて、国内外において既存の芸術概念を問い直す動きが活発化し、多様な前衛美術が登場した。日本においても東京に限らず各地で前衛美術グループが結成され、既存の公募団体が形成してきた美術制度に対する批判が広がっていった。

そうした中で福岡において結成された九州派は、日本の前衛美術の中でも特異な位置を占める存在である。東京のネオ・ダダや関西の具体美術協会と並行しながらも、九州派はより生活に接近した地点から美術を再定義しようとした。

九州派の特徴は、「生活者」としての視点に根ざした表現にある。多くのメンバーが専門的な美術教育を受けておらず、労働者としての実感を持ちながら制作を行っていた彼らにとって、美術は制度の中にあるものではなく、現実の中に引き下ろされるべきものであった。日常の中にある卑俗さや物質性をそのまま表現へと転化する姿勢は、当時の日本美術において極めてラディカルなものであった。

その背景には、三井三池争議に象徴される労働運動の高まりがある。社会的現実と切り離されない意識が、九州派の表現の根底を形成していた。

素材の選択においてもその姿勢は顕著である。廃材や廃棄物が用いられたが、とりわけ象徴的なのがアスファルトである。都市化の進展とともに身近に存在したこの素材は、安価で加工しやすいだけでなく、その黒い光沢は石炭産業と労働の記憶を喚起するものであった。アスファルトは単なる素材ではなく、時代と社会を内包する物質として機能していた。

九州派は積極的に東京での発表を行い、その存在を示そうとしたが、前衛芸術の方向性をめぐる内部対立により1959年に分裂する。その後再編されるものの、1968年をもって活動を終える。

九州派の活動は、作品の保存よりもその場における効果や行為を重視していたため、現存作品は極めて少ない。むしろ重要なのは、その後も各作家が制作を継続しているという事実である。

長らく「伝説的存在」として語られてきたが、1988年の福岡市美術館における再検証を契機に、その実態が明らかになり始めた。さらに2015年の資料集刊行を経て、九州派は現在、再評価の段階にある。